

# 読書のすすめ

(株)小田急トラベルサービス  
監査役 近藤 節夫

若者の読書離れが言われて久しい。これだけ多彩な情報が巷に溢れ、情報源があると読書必ずしも万能とは思われていないのかも知れない。しかし、読書による多面的な効用は、古来いかなる情報源より優っていることは言うまでもない。ましてや、ビジュアルな情報だけに頼らず、感性や創造力を求められる旅行業者にとっては、それらを触発し、文章構成力や、思考力を育み、深い洞察力を培ってくれる読書の効果のほどは計り知れない。

考えてみるがよい。顧客に應對して旅行先を説明する時に過去に自分が添乗した貴重な経験談や、ガイドブックやその他の資料から得られた知識を駆使したところで、それだけで深みのある説明が出来るわけがない。それには、そこに生活する人々の物の考え方が伝わって来なければいけないし、話の中に生活臭が感じられなければ生きた話にはならない。旅行が高度化して来ると顧客の求める知識欲は益々専門化し、深化する。顧客が望んでいるのは、平凡な生活の中に醸し出される日常生活の襞や生の匂い、つまり人々の生きた会話や、考え方であり、それらを史実にダブらせ、想像力を働かせ、旅行前のわくわくする興奮を楽しむのである。それを少しでも補うのが、ひとり旅の体験で土地の人々から得られる臨場感の感得によるメリハリのある説得であり、その国と人々について詳述した大河小説から得られる知識や、時代考証的発想と想像力なのである。

例えば、中国へ出かける添乗員が、通り一遍のガイドブック的情報を仮に持ち合わせていても「三国志」や、パール・バックの「大地」すら読んでいないとしたら、かつての中国人が親子何代にも亘り一つの仕事に精魂を傾けたり、一文無しになっても家宝を手放さない頑固なこだわりのような考え方は、とても理解出来まい。今日ではある程度変貌しているにせよ、そこに暮らす人々の考え方のバックボーンにはそのような因習的な哲学と信念が毅然として貫かれているということを知らなければ、所詮それは中国を皮相的に見ているに過ぎない。中国では、誰でも学校教育の間に必ず読むべき書として、「西遊記」「三国志」「水滸伝」の3大名著の通読がある。これらに通曉していないと悠久6千年の伝統と文化を築き上げた中国人の真髓は理解出来ないとされている。

私たちの知識だって所詮付け焼刃でしかない。しかし、少しでも旅行業者としての極意を会得しようという気があるなら、大河小説を読むことを薦めたい。同時にそれが相手の国を知る一番の近道である。

これは、どこへ行くにしても同じことである。アメリカ人や、アメリカという大国を知ってもらうのに「風とともに去りぬ」(映画では分からない)や、「怒りの葡萄」が描写した時代背景を知らず、またフランスを語るに「レ・ミゼラブル」「モンテ・クリスト伯」「チ

ボ一家の人々」等に描かれた革命的動乱や、戦争に翻弄された時代と市民の生き方を精読せずして高尚な顧客に対してどんな説得力のあるトークが出来ると言うのか。

旅行業界の若手社員へ訴えたい。通俗的ではあるが、若い内に出来る限り内外の大河小説を読みこんで欲しい。それは、一生君たちの財産となり、話題が豊富になるばかりでなく、創造力を鍛え、構想と企画の能力を引き出し、思考力に磨きをかける。加えて、それは文句なく面白い。良書を読むことは、同時に作文力をも向上させる。これらは、旅行者にとって最も基本的に求められている素養ではないだろうか。

一般的に読書人口が減少している反面で、急速に普及しているパソコンも大いに結構だし、ガイドブックから得られる情報にも大いに助けられる。しかし、骨太な知識、説得力のある論理の構築、そして滲み出る教養が身に備わるといふ点では、長い目で見て読書に優るものはない。

いま高いレベルのグループ旅行の添乗員に対して要求される条件の中で、当たり前の健康、公平感、語学力、人間性などを別にすれば、顧客から最も厳しい注文がつけられるのは、添乗員の柔軟にして幅広い教養であり、深い知識である。その点で、日頃より読書に親しんでいる人にとっては、「読書が趣味」というだけで、知識人であるとの顧客の信頼と評価を勝ち得ることが出来るし、その趣味が信頼と知識を増幅し、旅行業界人としての器を大きく育ててくれる。反面、読書に関心を持たないことは、そのこと自体、「なまけもの」の謗りを受けて当然だと思う。

敢えて辛辣に言おう。いま読書にまったく関心と興味が持てないようでは、旅行業界に留まっても所詮永遠に未来への扉は開かれないであろう。